

トーンハレ管が
50人の聴衆でコンサート

4月19日に連邦政府が感染症防止対策緩和策を発表した直後の22、23日、半年ぶりにチベリビ・トーンハレ管弦楽団は50人の

トウルグが司会をした作品談義も配信され、観客の期待を膨らませた。当日は同じ司会者が上演を誘導する形で映像番組としての完成度も高かつた。オーケストラと合唱が練習場から遠隔共演する形は、ストリーミングでは違和感なく聴こえる有効な解決策だ。

と破綻し、高音も毎回伸びない。母難役のユディット・シュミートも同様にレガートと温かさに欠けたため、クライマックスへの高揚感が得られなかつた。最後に前述の床が急傾斜してピアノが落ちる演出はスリーリングだつた。

きよりもストリーミングに向いていると思われる。バルトリの高い芸術性はライブ演奏でなくても十分胸に迫るが、最後のアリアのあと、鳴り止まない拍手がリズミカルなコールに変わると、泣きそうな顔になるところなど、実際の劇場では見られないズームアップ映像も貴重だ。伯爵のジョン・オズボーンの輝かしい歌唱も懐かしく、當時常連だったエヴァ・リーバウもベッティーナとアディーナを好演した。

後者はインゴ・メッツマッハーの安定した指揮と、イザベル・レイの少女役も上手いが、「お宝映像」としての価値は、ヨナス・カウフマンの瑞々しい声と若者ぶりを

「Souvenir」フリ

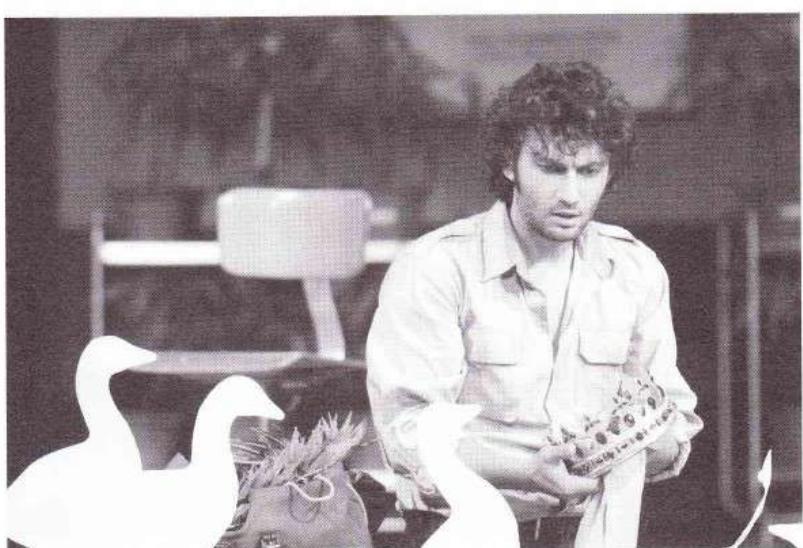
聽衆の動線が交差しないように、ホールの右側だけに2、3席空けて50席が配置された。「ランチ・コンサートだからカジュアルに」と、トーンハレのTシャツを着たブランギエの指揮は、冒頭では空回りし音楽が伴わない。ドラマティックな展開部でようやく気持ちが合い始めたが、せつなく効果的に膨らんだフレーズもテンションが保たれないのが残念だ。しかしテンポの変わり目の統率力はすばらしい。弦のユニゾンの美しさと広がりに包まれ、大きすぎずなるほどの生の音を浴びた聴衆は立ち上がりて拍手を送った。

は、冴えないホフマンに扮し、ふだんのマツチヨなオーラが薄れて興味深い。ステッラのエリカ・ペトロチエッリはオペラスタジオ生とは思えない存在感。合唱の伴わりに被りもののマスクを着けた20人強のエキストラが学生たちを演じた。

3人の女性の家と共に通して使われる三次元柄の床が効果的に使われる舞台も秀逸だ。オリンピア役のカトリーナ・ガルカラは、当歌舞劇場デビューと初役にもかかわらず好演した。

休憩中には数人のライヴ・インタヴュウが挟まれた。駆け出しのころから当歌舞劇場は、歌劇場デビューと初役にもかかわらず好演した。

ルクと、互みに繋がるエンタイングに快感を残した。観客の好奇心を満足させる情報満載の、豪華なストーリーミングとなった。



「Souvenir」から。《王様の子供たち》でのカウフマン © Suzanne Schwartz

チユーリヒ歌劇場の 新演出ライブ配信

4月11日にチューリヒ歌劇場でプレミエを迎えたオーフエンパック『ホフマン物語』新演出は、まだ無観客上演しか許さねず、ライブ配信された。今回は初日2日並に演出を担つたアンドレアス・ホモキニ監督、指揮のアントニー・フォリアー二ニ主演のサイミール・ビルグを招き、ドラマ

世界でいちばんすばらしい歌劇場の一つと語った。